2021年5月2日礼拝説教

救いに至るローマ書の道（２）骨折り損のくたびれ儲け　　ローマ6:20～23

「骨折り損のくたびれ儲け

とは大変な苦労をしながら何の益ももたらされないこと、つまり無駄なことをしただけという意味でよく使われます。日常的なことでしたらある程度許せることであっても、人生に大きくかかわってくることでしたらそうはいきません。このローマ人への手紙を書いたパウロも同じようなジレンマに陥っていました。救いを求めて一生懸命、真面目に生きているにもかかわらず、いつまで経っても不安があり、落ち込むばかりなのです。しかしついにパウロはその世界から解放されました。今日はそのことに焦点を当ててみことばを学んでゆきたいと思います。

その前に先週の復習をしておきたいと思います。先週より「救いに至るローマ書の道

をテーマに学びを進めています。先週第一番目の聖句はローマ3:23、「すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができず」でした。「すべての人は罪を犯した」と言われても、そんなに問題のある生活をしているとは思わないという方が多い事かと思います。しかし、聖書が「罪」というとき、それは「犯罪」や「不道徳」だけでなく、人の心の中にある罪の性質と、そこから出てくるものの考え方やものごとに対する態度、また生き方のことも指しています。しかも、他の人や社会に対するものだけでなく、神に対する心のあり方、態度、実際の行いが問われるのです。ですから聖書が言う、罪とは根本的には神に対するものです。なぜかと言うなら、私たちはみな神によって造られた者ですから、造り主である神に対して責任があるのです。聖書の言う「罪」ということばの意味は「的外れ」という意味ですが、この的とは神様のことです。ですから的はずれとは神様から外れているということになります。「すべての人は、罪を犯した」という言葉に「神に対して」という言葉を加えて考えてみれば、「すべて」の中に自分が含まれていることが分かるのではないでしょうか。

次に「神からの栄誉を受けることができず」というのは本来の意味は「神の栄光に足らない」、つまり、神が人間に求めておられる基準に届いていないという意味です。神は、私たち人間を、どんなものよりも素晴らしく造ってくださいました。詩篇8:5に「あなたは、人を、神よりいくらか劣るものとし、これに栄光と誉れの冠をかぶらせました」とあるように、人間は神に最も近い存在です。ですから、神は、人にそれにふさわしい基準を求められるのです。しかし、現実の人間の姿はそのようなものではありません。そのギャップを人間は神の基準を適当に下げたり、居直ったり、見て見ぬふりをして過ごしてきました。時には、罪を罪と呼ばずに「病気」と呼ぶ場合だってあります。つまり、病気ということであれば本人は悪くないし、責任は無いということになるからです。

しかし神が定めてくださった基準を引き下げたり、それを取り去ったところで、罪が罪でなくなるわけではありません。人間の側で罪との折り合いをつけようとするのは、人間を神の栄光から遠ざけ、自らを卑しめ、人間を人間でなくすことでしかないのです。聖書が「罪」を語るのは、私たちを責め立てたり、裁いたりするためではありません。むしろ人間が罪から解放されて、神が人間に与えてくださった栄光に立ち返るためなのです。そのためには罪人としての現実の姿を知ることが先ず大切なのです。

「救いに至るローマ書の道」の第二番目の聖句は、ローマ6:23です。「罪から来る報酬は死です。しかし、神の下さる賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです。」ここではキリストによる救いと解放を教えています。キリストはある時、こう言われました。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。罪を行なっている者はみな、罪の奴隷です」ヨハネ8:34

罪の奴隷とありますが奴隷にはどのような特徴がこの時代にはあったのでしょうか？　先ず奴隷には人権がありません。それは何をするにしても自分の意志や思いで行動したり、決断が出来ないということを意味します。細かい部分では自由があるようでいて、根本的には所有者の意向にそって動かなければなりません。また奴隷は奴隷状態にある限り死ぬまで働かされます。自分でそろそろ休みたいと思っても勝手に休むことが出来ません。所有者次第です。つまりイエス様が「罪の奴隷

と言われた時に罪は人をいつまでも束縛するものだと言っておられるのです。そのような関係は生きている限り続くのです。お金を借りてローンの返済が死ぬまで続くとしたら気が重くなりますね。そのようなものです。

罪の奴隷とはいつまでも罪の状態のままでいて抜け出られないことなのですが、何が私たちを罪の奴隷の状態のままにいさせるのでしょうか？パウロは私のうちに働く原理、法則がそうさせていると言います。「私は、善をしたいと願っているのですが、その私に悪が宿っているという原理を見いだすの

です。
　ローマ 7:21　そして最終的にそこで得られる結果、つまり「罪の報酬」は「死」だと言うのです。ここで言う「死」は、からだの死だけでなく、たとえからだが生きていても、その霊やたましいが神のいのちから遠く離れ、人生を喜びと平安をもって生きることができないという霊的な死のことでもあります。
　そのような罪の奴隷の状態から抜け出るためにはこつこつと努力し、真面目に生きて、善行を重ねれば良いということではありません。パウロは他人から見ると、品行方正で申しぶんの無い人でした。しかし、パウロは自分自身「私は、自分でしたいと思う善を行わないで、かえって、したくない悪を行っています。
ローマ 7:19 と悩み、「私のからだの中には異なった律法があって、それが私の心の律法に対して戦いをいどみ、私を、からだの中にある罪の律法のとりこにしているのを見いだすのです。
ローマ 7:23 と自分の罪の現実に打ちのめされ、挙句の果てに「私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。
ローマ 7:24 のように絶望の淵においやられるのです。パウロがそうだからと言って、自分とは別だと思わないでください。パウロのように真面目に突き詰めて考えるから悩むのだ。もっと気楽に楽しんで人生を考えればやってゆけるかのように考えないでください。
　「罪から来る報酬は『死』です。
　ローマ 6:23 とあります。「報酬」とは自分のしたことに対する報い、正当な評価ということです。自分が働くことによって利益を得たら、それなりに自分が報酬として得ます。もちろん、働いて、損になったらマイナスの報酬いわゆる赤字となるわけです。
　罪の奴隷の状態から抜け出たいと思っても、その法則の中にいる限り、自分で抜け出ることは出来ません。法則とはそのようなものです。どんなにその場でジャンプしても重力の法則によって元に戻るのと同じです。その状態から抜け出るためには誰かにあるいは何か外から働きかけて自分を救い出してもらうしか道はありません。
　次に「罪の報酬
　は結果としてあることに対し「永遠のいのち」は「賜物」として与えられるのですとみことばにあります。永遠のいのちが「報酬」と言われていないことに注意して下さいい。誰も、どんなものによっても、「永遠のいのち」を勝ち取ることはできないのです。「永遠のいのち」にふさわしい行い、働きなど、罪の奴隷である者にはとうていできません。それは、神がくださる「賜物」、「ギフト」であって、無代価で受け取るべきものなのです。かつて、奴隷は品物のように売り買いされましたから、奴隷には値段がつけられました。それで、奴隷が解放されるためには「贖い金」といって、それぞれの奴隷の価値に似合うものが支払われなければなりませんでした。そして、そのように代価を払って奴隷を自由にすることは「贖い」と呼ばれました。この言葉は、聖書では、イエス・キリストの救いを表すのに使われています。キリストが、私たちを贖ってくださったというのは、罪の奴隷である私たちに自由を与えるために、代価を払ってくださったことを意味しています。その代価は、いったいどれほどのものでしょうか。それは、どんな値段もつけることができない、キリストのいのちでした。イエスは「人は、たとい全世界を手に入れても、まことのいのちを損じたら、何の得がありましょう」と言われました。私たちひとりひとりは、全世界のあらゆるものよりも価値があるのです。イエスは「そのいのちを買い戻すのには、人はいったい何を差し出せばよいでしょう」マタイ 16:26 と言われましたが、イエスが、私たちを買い戻すために差し出してくださったのは、ご自分のいのちでした。神は、私たちを、キリストのいのちに等しいほどの価値あるものと認めてくださっているのです。
　「罪から来る報酬は死です。しかし、神の下さる賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです。」ローマ 6:23 このことは、キリストの十字架と復活によって成し遂げられました。イエス・キリストの十字架が私たちを罪から「解放」し、復活が、私たちを罪の結果から「回復」してくれるのです。キリストのいのちという、どんな値段もつけられない価値あるものによって、私たちは、私たちの価値を取り戻します。キリストを信じるとき、そのキリストのいのち、つまり永遠のいのちを受けます。このいのちによって私たちは、罪から解放され続け、罪の結果から回復され続けながら、新しい歩みをすることができるようになるのです。キリストによる、この解放、この回復を、信仰によって受け取り、日々に体験して歩もうではありませんか。

2021年5月2日礼拝説教

こんな話があります。あるところに、とても腕のよい職人がいました。彼が作る鉄の鎖はとても丈夫で誰も壊すことができない完璧なものでした。完璧なものを作ることができる人は、他の人が作ったものの欠陥を見破ることができます。それで、彼の手にかかれば、他の人が作った鎖は、すぐに壊されてしまうのでした。ある日、この職人が酔っ払って乱暴を働きました。それで、牢屋に鎖で繋がれました。酔いが覚めて、自分が鎖で繋がれているのを知ったこの職人は、こう言いました。「俺を鎖で繋いだって無駄さ。こんなものはすぐに壊してみせる。」彼は鎖の輪のひとつひとつを指で触って、その欠陥を捜しました。そのうち彼の顔が青ざめてきました。そして、叫びました。「なんてこった。この鎖は壊せない。完璧に作られている。何故ならこれは、俺が作った鎖ですから。」人は、自分が犯している罪によって自分を縛っているのです。自分が作った完璧な鎖で自分を縛っており、自分の力ではそこから逃れることができないのです。これは心の世界で言うところの依存症のからくりに似ています。いつだって自分は回復することが出来る。と言いながらいつまで経っても回復されるどころか、ますます悪くなるのです。

このように罪に束縛された状態を、聖書は「罪の奴隷」と呼んでいます。罪は人を奴隷にします。罪という「主人」に仕えて、いくら働いても、得られる報酬は「死」です。もしも私たちの人生がそのようなものなら、なんと惨めではありませんか。これこそ究極の「骨折り損のくたびれ儲け
です。

いったん罪の奴隷となったら、もう自分の力では自分を解放することはできません。しかし、人には出きなくても、神には出来るのです。キリストと呼ばれる救い主が来て、人々を罪の奴隷から解放し、罪の結果から回復させてくださるというのです。キリストのいのちという、どんな値段もつけられない価値あるものによって、私たちは、私たちの価値を取り戻します。キリストを信じるとき、そのキリストのいのち、つまり永遠のいのちを受けます。このいのちによって私たちは、罪から解放され続け、罪の結果から回復され続けながら、新しい歩みをすることができるようになるのです。キリストによる、この解放、この回復を、信仰によって受け取り、日々に体験して歩もうではありませんか。